

犯罪心理学講義ノート

—犯罪に至る心理と立ち直り支援の理解—

瀧村 美保子

元実践女子大学人間社会学部非常勤講師
東京婦人補導院（法務省矯正施設）

はじめに

筆者は、矯正施設に収容された犯罪者や非行少年の心理査定（アセスメント）を行ってきました。その職務の中で、なぜ、彼ら・彼女らが犯罪等に至ったのか、立ち直りに向けて有効な支援は何かを考え続けてきました。そして、有効な支援のためには、個々の犯罪者の心理の理解と親身な関わりが必要であることを実感してきました。本講義でも、犯罪心理学の概論や、犯罪現象の理解よりは、なぜ人は犯罪に至るのか、立ち直りに有効な支援は何かという二つの問題を考えることに焦点をあてています。

第1回目の講義では、受講生の皆さん（以下、「参加者」と言います。）に、犯罪や犯罪者に関する考えを問うアンケートを実施しました。その結果を犯罪統計と比較して、参加者の考えや感じ方の確認を行いました。その後の講義でも、引き続きコメント・ペーパーを利用しながら、参加者の意見や視点を確認し、講義内容につなげていきました。

犯罪に対する参加者の認識と実情

アンケートでは、参加者の多くが「犯罪は増えていない」、「外国に比べれば日本は安全だとは思う」と答えていました。その一方で、「恐ろしい事件を見ると、そうした犯罪者が自分の周りにもいるかもしれないと思う」、「自分（や家族、友人）もいつ被害者になるか分からない」、といった不安を記載し、「凶悪犯罪」「性犯罪」「薬物犯罪」の3つは増えている（70%）、薬物犯罪については、「薬物を使用すると頭がおかしくなる（70%）」との否定的な印象を記載していました。考えの根拠として、ほぼ全員が、テレビのニュース、雑誌、インターネット等、メディアで得た情報を第一に挙げていました。

犯罪統計（本稿では、平成29年版犯罪白書から平成28年のデータを引用しています。）によれば、刑法犯の認知件数は約99万6千件で、平成15年から14年連続して減少し、戦後初めて100

万件を下回っています。また、刑法犯に含まれる凶悪犯（警察白書による。殺人、強盗、放火、強姦の4つの罪種）についても、いずれも認知件数は減少し、検挙率は上昇しています。性犯罪については、強姦だけでなく、強制わいせつも減少しています。

交通犯、薬物犯等を含む特別法犯の新規受理人員は約40万2千人で、平成12年から17年連続して減少し、こちらも戦後最低数を更新しています。参加者が不安や拒絶感を示した薬物犯罪について、もう少し詳しく見てみます。

覚せい剤取締法違反は、「戦後の悪玉のトップ」（吉岡）とされてきましたが、検挙人員は、昭和29年の第1のピーク（約5万6千人）、昭和59年の第2のピーク（約2万5千人）、平成9年の第3のピーク（約2万人）を経て、最近ではほぼ1万人強の横ばい状態が続いています。何度逮捕されてもやめられない乱用者が一定数存在すると考えられますが、以前に比べれば数は減っています。また、かつて少年を中心に大流行していた毒劇物取締法違反の検挙人員（昭和50年代は3万人超）は激減しています（平成28年は251人）。他方、大麻取締法違反の検挙人員は、平成26年から3年連続で増加し、平成28年は2722人（前年比26.2%増）です。危険ドラッグは、平成24年から増加して注目を集めていますが、平成28年の検挙人員は920人（前年比23.1%減）でした。

薬物犯罪は、種類や態様を変化させながら蔓延し、暗数も多く、根絶が難しい犯罪と言われています。ただし、戦後の動向を見れば、現在はかなり抑止されていると言えます。参加者の薬物犯罪への批判や不安は、参加者より高い年代の人々の中でもしばしば共有されているものです。大麻の増加傾向や危険ドラッグの実際問題とは別に、薬物犯罪を強く断罪する我が国の風潮を反映している可能性があります。以下に述べるようなメディアの影響もうかがえます。

メディアが取り上げる犯罪事件は、全体の中のごく一部だけです。そして、ある犯罪事件がメディアに取り上げられるかどうかの基準は、重要であるか、確実な情報であるかだけでなく、大衆の興味や関心を引くかどうか、報道が発信者の利益とつながるかどうかといった、娯楽性や経済性によるように見受けられます。タレントやスポーツ選手、政治家などの有名人が関与した事件や、特異な態様の事件などについては、事実だけではなく、推測や、時には事件とは無関係な私的事情まで暴露されます。それに対するテレビ番組の司会者の何気ない発言や、インターネットで流布された匿名の意見が、事実のように一人歩きすることもあります。他方、重要であっても、興味を引かない事件はほとんど取り上げられません。こうして偏った情報源に無意識にさらされている状況が、犯罪実態の誤認や犯罪不安の高まりを助長している可能性もあると考えています。

また、私自身を含めて、情報の受け手の態度にも問題があるかもしれません。メディア情報の根拠の曖昧さや、それが明らかにデマであると気付いていながら、「忙しいから」「自分とは関係ない」「いちいち考えるのは面倒くさい」といった理由で関与せず、聞き流したり鵜呑みにしたりすることがあるのではないのでしょうか。自分の意見を持たず、周囲と議論することせず、メディアに判断を丸投げするような受け身の姿勢が、メディア報道の内容や在り方を後押ししているのかもしれない。

犯罪に対する認識にずれが生じやすいことも確認した上で、人はなぜ犯罪に至るのかという、一つ目の問題に考えを進めることにしました。

I 人はなぜ犯罪に至るのか

1. 犯罪に至る動機

参加者に、犯罪の動機は何か、背景にはどのような事情があるかを尋ねたところ、恨み、不安や不満、心の穴埋め、激情に駆られて、ゲーム感覚、スリル、非日常を求める気持ち、不遇な育ち等が挙げられました。人は誰でも犯罪を犯す可能性があるかという問いには、83%がはいと答え、その他に、自分自身も（犯罪を犯す）可能性がある（65%）、モノがないから犯罪を犯す訳ではない（65%）と回答していました。回答の根拠を尋ねると、参加者の多くが、メディアで繰り返し報道された凶悪犯罪、芸能人の犯罪、サスペンス・ドラマの犯罪を挙げ、少数は、家族や友人等も含めた自らの体験を挙げていました。

こうした考えにもメディアの影響がうかがえます。サスペンス・ドラマといったフィクションであっても、有効な情報源となっているようです。筆者は、メディアで取り上げられる犯罪は、犯罪全体のうちごくわずかで、特異なものが多いこと、犯罪の大半は、比較的軽微な交通犯罪と、窃盗を主とする財産犯罪で占められていることを説明しました。そして、より一般的な財産犯罪や交通犯罪の動機について問いかけたところ、参加者は、欲しかったから、乗りたいからと答え、でもそれだけではないような気がする、何だろうと考え始めました。

そこで、最もポピュラーな犯罪である窃盗の心理について、欠乏と退行の考え方を紹介しながら、犯罪の動機について考えていくこととしました。

2. なぜ盗むのか～欠乏と退行

「嘘つきはどろぼうの始まり」とも言われるように、盗み、どろぼうなどの窃盗は、人間社会で最古・最多の犯罪です。我が国の窃盗は減少しているとはいえ、刑法犯の認知件数の7割超を占めています。

盗みの動機は何かと考えた時、まず浮かぶのは、「足りない」「満たされない」という欠乏です。欠乏にも、様々な種類や状態がありますが、ここでは欠乏を、物質の欠乏、愛情の欠乏、自信の欠乏の3つに分けて考えます。

物質（モノ）の欠乏とは、食べ物が無い、必要な衣類や家が無い、保護者がいないといった、生理的な欲求や安全の欲求が満たされない状態です。物質の欠乏を動機とする盗みの例として、親も家も食べ物もない戦災孤児が食物を盗むといった行為などが挙げられます。

二つ目の愛情の欠乏は、愛してくれる親がいない、信頼できる友達や仲間がいないといった、所属や受容の欲求が満たされない、寂しく孤独な状態です。親の愛情を得たい子どもが、おねだりをしたり甘えたりできず、モノを盗んで、愛情の欠乏を埋めようとする、あるいは、関心（愛情）を引こうとする場合がその例です。物質と愛情の二つの欠乏は密接に関連し合い、しばしば重複しています。先ほどの戦災孤児の例も、物質の欠乏と愛情の欠乏が重複した状態と思われます。

3つ目の自信の欠乏は、自信が足りず、自尊心・自立心が満たされない状態です。自信を補償するために、盗みによって自分の知識や度胸、行動力等を自他に示し、他者の承認や尊敬を得、自身

の達成感や充足感を満たそうとする場合です。自立を課題とする思春期の子どもの盗みにも、しばしば自信の欠乏を補償する動機が見受けられます。孤独な少年が、不良者から指示され、思い切って万引にチャレンジして成功し、仲間入りさせてもらおうといった行動にも、「仲間外れにされたくない」という所属欲求だけでなく、「仲間から一目置かれたい」「自分でもやればできる」という自信の補償の動機がうかがえます。

ただし、窃盗によって得られるのは、一過性のかりそめの充足、社会的には承認されない充足です。窃盗は、悪いこと、社会のルールに反することと承知した上で、その場限りの充足を得ようとする行為であり、長期的に見れば、後悔や罪悪感、自己嫌悪、周囲との関係悪化などを生じて、元々の欠乏状態を一層悪化させてしまう場合が多くなります。

もう一つ、犯罪行動を助長する心理状態として、「退行」が挙げられます。退行は、「赤ちゃん返り」「子ども返り」とも言われるものです。実際の年齢よりも前段階の、子どものような気持ちや考えを持つ心理状態です。「退行」は、社会生活の中で求められる責任や自覚をいったん脇に置き、心身を休め、エネルギーを充電することに役立ちます。許容される場面や関係性の中での「退行」は、回復のための適応行動としてむしろ推奨されるものです。しかしながら、ところ構わず子どもっぽい心情となったり、場違いな行動に及んだりしてしまう身勝手な「退行」は、逸脱や犯罪につながってしまう危険をはらみます。

欠乏状態における「退行」は、逸脱行動を促進することがあります。「お腹が空いた」という欠乏状態で、「欲しくてたまらない、盗んでしまいたい」という渴望が生じて、子どもっぽい「退行した」心持ちになり、「お腹が空いたのなら仕方がないと許してもらえるだろう」といった見通しで盗んでしまうような場合です。さらに、「小遣いが少ないから仕方がない」「周囲が自分を分かってくれないから仕方がない」といった不満の正当化や責任転嫁を行い、内省力や判断力を鈍らせて、犯罪を促す面もあります。

薬物等の物質使用によって、意図的に退行を促進し、自身を犯罪行動に奮い立たせる場合も見られます。例えば、アルコール（という薬物）を身体に入れた状態で、感情任せに人を殴る、調子付いて異性に強引にからむといった犯罪の背景に、「酒を飲んで正体をなくし、いつもできない思い切ったことをやってやろう。」という動機が隠れていることがあります。酔って（子ども返りして）いたのだから許してもらえるはずなどと、退行状態を理由に悪意を否認し、犯罪を合理化するので、アルコールに対する寛容度が高い我が国では、飲酒下の逸脱行動が免責されやすい点も指摘されています（吉岡、1990）。

3. やめられずに繰り返す、依存の心理

「欠乏」、「退行」に続いて、犯罪の動機の理解に役立つ「依存（アディクション）」について考えていきます。ある特定の物質や行動プロセスに対して、「欲しくて（やりたくて）たまらず」「我慢できなく」なっている状態を、「依存している」「依存が生じている」等と言います。依存が生じると、理性によって行動をコントロールすることが難しくなります。その面で、「依存」は退行の一種とも言えます。

「依存」の対象となる物質と言え、アルコールや違法ドラッグなどが連想されがちですが、食物を含めた様々な物質、それに加えて、スポーツや仕事等の日常活動を含む多くのプロセスにも「依存」が生じます。糖質依存、インターネット依存などは、物質、プロセスへの依存の例です。

(1) 依存と犯罪・非行

社会生活を送る私たちは皆、何かに「依存」しながら生活しています。「依存」が必ず犯罪とつながる訳ではありませんが、矯正施設に収容されている受刑者や少年の多くは、「依存」の問題を抱えています。

「依存」が行き過ぎると、欲しくて（やりたくて）たまらない「渴望」と、物質使用やプロセス行動をやめようとしてもやめられない、「コントロールの喪失」が生じます。この「渴望」と「コントロールの喪失」が生じた状態を、通常の「依存」と区別するために、ここでは「依存症」と呼ぶことにします。

「依存症」に至ると、物質やプロセスを求める行動が、社会の許容範囲を越えた問題行動、場合によっては、非行・犯罪に結び付く危険性が高まります。アルコール依存症が、飲酒による危険運転や、飲酒下の粗暴犯罪を招いてしまう場合がそうです。覚せい剤や麻薬等の違法薬物の使用は、それ自体が犯罪と見なされます。ギャンブル依存症が財産犯罪に結び付き、わいせつ行為への依存症が性犯罪に結び付くこともあります。特定の相手との関係へののめりこみ（関係への依存症）が、傷害や殺人といった対人暴力の引き金になる場合も見られます。

(2) 人はなぜ依存症になるのか

依存が形成されるメカニズムは、しばしば「報酬仮説」によって説明されてきました。報酬仮説とは、対象となる物質又はプロセスによって得られる刺激が、「気持ち良い」「面白い」「楽しい」といった快楽（報酬）をもたらすため、人は、快楽を求めて、物質使用やプロセス行動を繰り返すというものです。

報酬仮説は、人が物質やプロセスにはまって繰り返してしまう、やめにくくなってしまふ依存の状態を分かりやすく説明します。ただし、多くの飲酒者のうち、アルコール依存症に至るのはごく一部であることや、多種の薬物を使用した人が最終的にはまってしまふ薬物が、最も強い作用や快感をもたらすものとは限らない（覚せい剤よりも咳止めシロップにはまる依存者がいる）ことなどは、報酬仮説だけでは説明が難しいと言えます。

これに対して、カンツィアン（Khantzian, E.J. 2008）は、依存に至る動機の主体は、快楽の追及よりも、耐え難い心理的苦痛の緩和であるという、「自己治療仮説」を主張しました。「耐え難い心理的苦痛」を緩和するためのなけなしの対処（自己治療）として、物質使用やプロセス行動に及び、やめられなくなっている状態が「依存症」であるという考えです。

「耐え難い心理的苦痛」は、自分自身をコントロールできないという無力感によってもたらされます。無力感は、①感情を調節する力、②自尊心を保つ力、③セルフケア能力、④人間関係を築く力など、自分自身をコントロールしながら社会生活を営むために必要な能力が、自分には十分備わっていないという感覚から生じます。物質使用やプロセス行動は、これらの力が高まったと感じさせたり、不足していることを忘れさせたりして、自己コントロール感を高めさせて無力感を軽減

し、心理的苦痛を緩和する特効薬となります。その効果は劇的かつ即効的です。ただし持続しないため、効果を得続けるためには、物質使用やプロセス行動に従事し続けなければなりません。こうしてあくなき没頭と反復が生じ、物質使用とプロセス行動へのコントロールが失われてしまいます。

「自己治療仮説」は、物質やプロセスにはまる人とはまらない人がいることや、ある人が何にはまるかは、物質やプロセスがもたらす快楽の一般的な強度や質では説明できないことの理解にも役立ちます。例えば、アルコールの場合、鎮静、リラックス、多幸感といった快楽をもたらすと同時に、否定的な感情の緩和、対人関係の円滑化、自尊心の回復等の心理的苦痛の緩和に役立つ面があります。アルコール摂取の目的が、快楽の追求のみである場合、アルコールを摂取して快楽を得られれば、目的が達成され、それ以上にはまり込んでいくことはないかもしれません。しかし、アルコールに心理的苦痛の緩和を求める場合、「鎮痛薬」としてのアルコールを手放せずに切れ目なく求め、耐性（同じ効果を得るために必要とする量が増えること）ができて、深みにはまるかもしれません。また、依存症の中核をなすものは、「身体依存」ではなく「精神依存」である点からも、依存症に至る動機の中心が、「心の痛みを取るため」という考えは納得できるものです。

4. 個人的な特性と犯罪

犯罪に至る心理について考える最後に、犯罪行動と結び付きやすい個人的な特性について紹介します。本稿では、「特性」という用語を、個人の身体特徴、気質、感情傾向、考え方（認知傾向）、性格特徴、行動傾向なども含めた、「その人らしさ」全般を指して用いることとします。

犯罪と結び付きやすい個人的な特性があるという考え方は、明確で分かりやすく、直感的な思考にもフィットしますが、決め付けやラベリングにつながる危険性もあります。例えば、中世ヨーロッパで行われていたという「魔女狩り」は、「魔女であるという個人的な特性」を社会的悪、あるいは犯罪の原因と捉え、その特性を有する人間を火刑という残虐刑に科したものとと言えます。これは、一つの原因をとことん追求する態度の行き過ぎが招いた悲惨な結末と言えるかもしれません。

近世以降は、犯罪の原因となる特性を明らかにするために、客観的な手法を取り入れる試みが始まっています。イタリアの元軍医ロンブローゾ（Lombroso, C.）は、犯罪を行った者とそうでない者の違いに着目し、犯罪者の身体部分の測定データを分析して犯罪者の特性を探りました。彼は、「犯罪者とは生まれついた者である」という「生来性犯罪者説」を主張しました。その説は極端で、現在はほとんど支持されていません。ただし、ロンブローゾの視点と研究方法は、その後の犯罪者研究の発展に大きく寄与しています。彼が、犯罪学の父と称される所以です。

その後も、「犯罪者は知能が低い」（ゴダード（Goddard, H. H.）、「多くの犯罪者は精神病質（サイコパス：Psychopath）である」（ヘア（Hare, R. D.））等、個人の遺伝的、生得的な特性と犯罪行動の結び付きを強調する仮説が提起されてきましたが、現在、単純な因果関係はほぼ否定されています。

(1) 一次的特性と二次的特性

では、犯罪と関連する個人的な特性はないのかと言えば、そうではありません。状況が同じであれば、どんな人も必ず同じ行動を取る訳ではありません。行動の選択には状況を超えた個人差が関与します。犯罪と特性の関連を誤解なく理解するために、まずは、特性を一次的特性と二次的特性に分けて考えてみます。

個人には、元々持って生まれた一次的特性があります。一次的特性は、成長に伴って変化し、二次的特性を形作っていきます。例えば、A君は、高知能で集中力も高い一方、内気でこだわりが強く、お友達とうまく遊べませんでした。ところが、祖父から習った囲碁に没頭して試合に挑み、年上の子供や大人も負かすほどになりました。囲碁が自信につながり、学校でも得意な理数系科目をクラスメートに教えるなどして一目置かれる存在になりました。A君の場合、高知能や集中力の高さといった一次的特性が強みとして伸ばされ、囲碁への自信、学力の獲得、向社会的行動といった二次的特性が育まれたものと言えます。しかしながら、もしも、学校での孤立やいじめ、引き込みといった経験によって情緒的な傷付きを負ったとすれば、A君の一次的特性は、不満や怒りと結び付いた頑固さや理屈っぽさとして表れ、孤立や不適応状態を増悪させたかもしれません。このように、同じ一次的特性でも、強みとして伸ばされるか、情緒的な傷付きと結び付くかによって、異なった二次的特性が作られる可能性があります。

(2) 犯罪リスク要因としての二次的特性

犯罪者の研究の中では、犯罪と関連する特性として、「否定的な感情傾向」（アグニューら（Agnew, R.））、「敵意的な物事の捉え方」（ドッジら（Dodge, K. A.））、「自己統制力の低さ」（ゴットフレッドソンとハーシ（Gottfredson, M. R. & Hirschi, T.））、「刺激を求める傾向」（カスピラ（Caspi, A.））などが注目されてきました。それらの特性は、くよくよしやすい、イライラしやすい、不満や怒りを抱きやすいといった、「否定的な感情に捉われやすい傾向」（感情傾向）と、自信欠如、意欲低下、あきらめ、無力感、ひがみ、猜疑心、居直りといった、「否定的な考えを抱きやすい傾向」（認知傾向）と、見通しが無い、飽きっぽい、堪え性がないといった、「突発的、衝動的な行動に及びやすい傾向」（行動傾向）の3つの傾向に整理されます。

これらの傾向は、逸脱・犯罪行動に及びやすい「準備状態」を作り出し、刺激や出来事等の状況をきっかけとして、逸脱・犯罪行動と結び付き、すなわち、犯罪リスク要因と考えられています。犯罪リスク要因は、生得的に備わった元々の気質、性格、行動特徴等の一次的特性が、生育環境の中で、情緒的な傷付き体験と結び付きながら形成される二次的特性です。

(3) 発達障害と犯罪リスク要因

一次的特性である「発達障害」が、二次的特性である犯罪リスク要因と関連していくプロセスを考えてみます。ここでは、発達障害（神経発達症群）の一つ、「注意欠陥・多動症（Attention Deficit/Hyperactivity Disorder：ADHD）」と診断されたB君の例を見てみます。

B君は、小さい頃から腕白で元気が良く、擦り傷が絶えませんでした。それでも、お友達とのトラブルやけんかといった問題行動はなく、学業の遅れもありませんでした。ところが、小学校5年生になり、クラス替えをした頃から、お友達と仲良く遊べない、同じ行動が取れない、大人の指示

に従わないといった問題行動が目立ち始め、数日前に、お友達とけんかをした時に興奮して手を出し、お友達に怪我をさせてしまいました。保護者や教師は驚いて、「B君には何か障害があるのではないか」と心配し、医療機関に相談に赴きました。その結果、「ADHD」との診断が付されて、薬が処方されました。保護者や教師は、「なるほどそうか。」と納得し、処方された薬を飲ませればB君の問題行動は収まると考えていましたが、B君の行動はなかなか収まらず、クラスでもますます孤立するようになりました。またB君は、「薬を飲むとほっとするから嫌だ。」と言って薬を飲みたがらない上、登校を渋るようになり、イライラして自室にこもり、家の壁を叩くことがありました。保護者も教師も「訳が分からない」と困っています。児童相談所に行くべきか、カウンセリングを受けさせてはどうかなどと話し合っているところです。

「ADHD」は、その診断名の通り、注意散漫、多動性、衝動性といった行動特性（一次的特性）を症状とするものです。症状の一部が問題行動と重なる場合もありますが、非行・犯罪とは区別されるものです。しかしながら、「ADHD」傾向が、対人不信、孤立感、無力感といった否定的な感情・認知傾向と結び付くと、問題行動が逸脱行動や非行に増悪する場合があります。

B君の場合、問題行動が起こる以前から、活発で、落ち着きがないという行動特性が見られ、元々「ADHD」（一次的特性）を有していた可能性があります。ただし、問題行動が目立つようになったのは小学校5年生以降なので、その原因は、元々の特性（一次的特性）だけによるものではないはずです。B君の問題行動が、「ADHD」の行動特性の範囲を越えていることから、問題行動には別の要因が関連している可能性があると考えられます。保護者や教師は、B君の問題行動の原因や対処方法が分からず困惑し、問題解決の指針を得たい一心で医療機関を受診しました。そして、「ADHD」という医療的診断が付されるや、それこそが問題行動の原因であると捉え、処方薬によって問題行動が「魔法のように」消失すると期待してしまったのです。

問題行動のコントロールのためには、「ADHD」傾向と結び付いている、情緒的傷付きをケアする必要があります。B君が、不安や不満などの否定的な感情、被害感や無力感などの否定的な認知を持っているのかどうか、何がそのきっかけとなったのかを確認して、それに対処する方法を検討することが重要です。「ADHD」傾向ばかりを問題の原因と見なして薬物治療のみで解決しようとしても、B君の問題行動の変化は難しいかもしれません。

(4) DBDマーチ、サイコパス

「知的能力の低さ」、「ADHD」傾向といった一次的特性は、それ自体が犯罪リスク要因とは言えないものの、特性のマイナス面が強調されやすい、情緒的傷付きを引きずりやすいなど、レジリエンス（回復力）に乏しいところがあります。このことを「心理的脆弱性」と呼びます。

「心理的脆弱性」を有する一次的特性が、情緒的な傷付きと結び付いて、犯罪リスク要因である二次的特性へと進展し、非行・犯罪行動を引き起こす場合があります。「破壊的行動障害（Disruptive Behavior Disorder: DBD）マーチ」（ラヘイとレーバー（Lahey, B. B. & Loeber, R.）もそのパターンを示しています。「DBDマーチ」は、「ADHD」（一次的特性）が、叱責や非難、学校での不適応状況、自己愛の傷付きと結び付いて、大人への不信感や敵意（二次的特性）を生じさせて、「反抗挑戦性障害（Oppositional Defiant Disorder: ODD）」に進み、さらに、社

会に対する敵意、否定的自己同一性を特徴とする「行為障害（Conduct Disorder：CD）」に転じ、最終的には、「反社会的パーソナリティ障害（Antisocial Personality Disorder：APD）」に至る流れ（マーチ）です。

「APD」は、他人の権利を無視し侵害する、法を破る行為を繰り返す、他人を欺き操作する、衝動的あるいは無計画な振る舞いに出る、暴力を振るう、自分や他人の安全を考えない向こう見ずな行為に及ぶ、無責任、良心の欠如等の特性（DSM-5）が固定化した状態で、犯罪リスク要因とされています。

なお、「APD」の特性と一部が重複する「サイコパス（恥や不安、罪悪感、恐怖心、共感性の欠如、非情さ、スリルの追求等の特徴を有する一次的特性）」も、しばしば犯罪リスク要因と誤認されます。「ADHD」と同様、「サイコパス」も、犯罪リスク要因と結び付きやすい、「心理的脆弱性」を備えています。例えば、サイコパスの特性の一つとされる、共感性の乏しさは、否定的な感情や思考（認知）と結び付けば、人の痛みを感知しない冷たく残酷な行動傾向として表れるかもしれません。しかし、穏やかで肯定的な感情や思考（認知）と結び付けば、冷静で動揺しにくく、タフで合理的な行動傾向を示すかもしれません。「サイコパス」の特性を有する「サイコパシー」の中には、リーダーシップや重責を担う立場にある社会的成功者が多いという報告もあります（ダットン（Dutton, K.））。

犯罪リスク要因と誤解されやすい一次的特性として、「発達障害」、「サイコパス」等を例示してきました。一次的特性は、変化しにくい特性であるだけに、これらを犯罪リスク要因と捉えることは、無用で不正確なラベリングを招いたり、問題を混乱・悪循環させたりする弊害を生じます。せっかくの立ち直りの希望を妨げ、本人や支援者の足を引っ張る危険性を高めます。社会全体にとってもメリットはありません。

犯罪と結び付いている特性について考える場合には、その特性を強みとして変化させる方法を考慮して支援のきっかけとする視点が重要と言えます。

II 立ち直りの支援

講義の後半では、事例検討も行いながら、犯罪者の立ち直り支援の方法を考えました。

1. 「依存症」からの回復と犯罪からの立ち直り

犯罪に至る動機やメカニズムを学ぶ中で、「依存症」のメカニズムとの共通点が多く見えてきました。

「自己治療仮説」では、「依存症」のメカニズムとして、①感情を調節する力、②自尊心を保つ力、③セルフケア能力、④人間関係を築く力等が自分に不足しているという認知による「無力感」が、「耐え難い心理的苦痛」をもたらし、その心理的苦痛を緩和するために、物質使用あるいはプロセス行動が繰り返されて「依存症」に至ると説明されました。犯罪のメカニズムでは、欠乏等がもたらす「情緒的な傷付き」が、①否定的な感情傾向、②否定的な思考（認知）傾向、③突発的・衝動

的な行動傾向といった犯罪リスク要因（二次的特性）を形成することが確認されました。

二つのメカニズムを見比べると、「依存症」の端緒となっている「耐え難い心理的苦痛」は、犯罪の端緒となっている「情緒的傷付き」と似通っていることに気付きます。そして、物質使用やプロセス行動と犯罪行動は、どちらも「心理的苦痛を緩和するための対処行動」である点で共通しています。それゆえ、「依存症」からの回復に有効な対策は、犯罪からの離脱・立ち直りにも有効ではないかと期待されます。現在、我が国も含めた多くの国や地域で、依存症の回復スキルを犯罪者や非行少年の指導や教育に取り入れる試みが展開されており、その効果が評価されつつあります。

(1) 依存症対策の歴史

我が国の「依存症」対策を振り返ると、戦後、覚せい剤を主とした違法薬物の規制に向けて、「ダメ、絶対」という標語により使用等を強く禁止する、「理性モデル」が推進されてきました。「理性モデル」は、人々の道徳心や良心、あるいは、逸脱や疎外への恐怖や不安を喚起して、行動の自粛を促す介入方法です。刑罰や、「スケアード・ストレート（びびらせてやめさせる）」も同じ効果をねらったものです。「理性モデル」は、自らコントロールできる行動、すなわち習慣化・嗜好化していない行動の統制には有効で、未然防止にも効果的です。しかしながら、意思によるコントロール力を失い、「依存症」に至った人にはほとんど効果がないと言われています。「ダメ、絶対」教育や厳罰化が、違法薬物の啓蒙と抑止に役立っている一方で、再犯抑止の効果が小さいと言われるのは、薬物を反復する犯罪者の多くが、意思ではやめられない「依存症」に至っているためと考えられます。

もう一つ、しばしば用いられてきた方法は、「依存症」を急性疾患と捉え、短期集中的な「薬物治療」を施して完治を図るものです。「医療モデル」と呼ばれるこの方法では、アルコール等の急性中毒により緊急入院した患者に、別の「薬物」を用いて治療を行います。医療モデルは、急性疾患の緩和・治癒には欠かせず、有効である一方、「依存症」の治療にはあまり効果がないと言われています。なぜならば、「依存症」の動機が、心理的苦痛の緩和であるとすれば、一時の薬物治療による解決は困難であるためです。「依存症」は、急性疾患ではなく、糖尿病や高血圧症に代表されるような、生活習慣の問題が背景にある慢性疾患であり、長期的な生活指導を伴う介入が必要です。

このように、「依存症」の治療において、理性モデルも医療モデルも奏功せず、専門家が頭を抱えていた頃、アルコール依存症の当事者らが自ら開始した「アルコール治療モデル」が登場し、「依存症」の回復に大きな転機をもたらすこととなりました。

(2) アルコール治療モデルの活用

「アルコール治療モデル」は、アルコール依存症の当事者の相互支援から生まれた治療法です。当事者は、「依存症」という、コントロールを失った病と闘うことをあきらめ（無力感の受容）、理性や意思によるコントロールをあてにした「やめる宣言」を放棄しました。その上で、同じ依存の問題を持つ仲間と支え合いながら（対人関係の再構築）、「とりあえずは今日一日だけ（Just for Today）スリッパ（再使用）を回避する」という必要最低限の目標を掲げ、祈り、これまでの生活習慣を一つずつ変えようとししました（新たな習慣作り）。

その結果、アルコールの使用が止まる者が出始めました。小さな目標の達成が、「自分の感情を

調節できる」「セルフケアができる」といったコントロール感覚を育み、「自分自身には価値や能力があるという自尊心」を支え、仲間との日々の交流が「人間関係を築くことができるという感覚」をもたらし、心理的な痛みの緩和に役立ったものと考えます。何より、このプログラムは、他人から与えられたものではなく、当事者が自ら試行錯誤して作り上げたという誇りが、自信と自己効力感の向上に寄与したものと推察されます。

その後も、アルコール依存モデルの理念と方法をベースとして、一層構造化された治療共同体モデル、専門家の介入を取り入れたマトリクス・モデル等、目的に応じた多様なプログラムが創出されています。それらの理念と方法は、犯罪者の立ち直り支援にも役立てられています。

2. 元死刑囚の事例

講義では、犯罪者の具体的な事例を幾つか取り上げながら、犯罪のメカニズムと立ち直り支援について学びました。その一つ、元死刑囚N夫の事例をここで紹介します。

元死刑囚N夫の事例を取り上げた一番の理由は、事例に係る詳細な情報が、書籍等で一般公開されていて入手可能であったことです。事例検討は、できる限り、本人のありのままの情報を把握して行うことが望ましいのですが、犯罪者に係る個人情報、講義等で取り扱うことができません。N夫については、彼の生い立ちや逮捕後の生活状況を一般書籍等から知ることができた上、石川義博医師による鑑定内容について、特集番組による動画や録音記録もあり、N夫の人となりを把握しやすかったため、犯罪者のアセスメントと支援について考える上で最適の教材であると考えました。

(1) 生い立ちと犯罪

N夫は、19歳時、盗んだ短銃により4人の人を射殺する事件をじゃっ起して世間を震撼させた元死刑囚です。中学卒業後単身で上京したN夫が、離職・徒食中に及んだ事件について、当時のメディアは、ろくに教育を受けられず、社会常識も道徳的判断力も身に付いていなかった未熟な若者が、初めて凶行に及んだと報じ、その原因が「貧困と無知」にあったことを強調しています。

戦後混乱期である昭和24年、北海道網走市で8人きょうだいの第7子4男として生まれ育ったN夫は、幼い頃から保護者による拒絶・放置（ネグレクト）を受け、兄たちから激しい暴力（虐待）を受けて育ったと述べています。母代わりに慕い、心の支えとしていた長姉との2度の生別が、幼少時の家出の反復や、学校不適應に拍車を掛けた様子もうかがえます。何度家出しても姉に会えず、保護されては家庭に送り返され、再び暴力被害にさらされ続けた体験は、N夫の、「逃げて問題も解決しない」「誰も助けてくれない」といった絶望感や無力感を強めさせたものと思われます。思春期に至ると、自分よりも弱い妹や姪（長兄の子）に暴力を振るい、盗みを繰り返すなど、暴力の被害者から加害者に転じています。中学を卒業して上京した後にも、職場から逃げ出して離職と徒食を繰り返す中で建造物侵入や窃盗に及び、少年鑑別所に2度収容され保護観察処分等に付されています。

こうした生い立ちを見ると、N夫の無力感を煽り、自尊心を傷付けたのは、保護者やきょうだいによるネグレクトと虐待、唯一心の拠り所としていた長姉との関係喪失であったと感じられます。

基本的な信頼感や安心感を持てず、他人と親密になれず、ハーロウ（Harlow, H.）の実験で観察された愛着障害のアカゲザルのように、いつも独りぼっちで、緊張しておびえながら過ごし、闘うか逃げるか（fight or flight）の対処ばかりに苦悶する状態であったことも推察されます。

他方、N夫は子どもの頃から読書や作詩を好み、上京後は、私立高校（定時制）への入学を果たしています。拘留中にも複数の書籍を著して出版しており、優れた知的特性を有していた様子がうかがえます。こうした情報からは、家庭の貧しさと無知が事件の主たる要因であったとする見方には疑問が生じます。

(2) アセスメントと支援計画

講義では、N夫の生育歴、非行・犯罪歴、精神鑑定の情報を共有した上で、参加者個々に、「なぜ彼は犯罪に及んだと考えるか。再犯の危険性はどのくらいあると考えるか（問題点の分析）」、「再犯を防ぐために必要な処遇・支援の方法は何か（立ち直り支援）」、「妥当な刑事（あるいは保護）処分についてどう考えるか」という3つの考えについて「アセスメント・シート」にまとめて、グループ討議と意見発表を行ってもらいました。

N夫の資質の一次的特性として、参加者からは、知的、聡明、内向的、活動的、きゃしゃで女の子のような風貌、父に似た容姿等が挙げられました。環境の特徴として、実母の拒否とネグレクト、兄たちの暴力、母代わりの姉との別離、実父の不在と死別、学校での孤立等が挙げられました。それらが影響し合って、N夫の感情傾向（寂しがり、心許なさ、おびえていてイライラしやすい、気分が暗い、怒りや不満が強い等）、認知傾向（対人不信、被害的、反抗的、挑戦的、ひがみっぽい、感情や考えが極端に変わる、希望が持てない、希死念慮が強い、銃を好む）、行動傾向（対人関係を回避しやすい、逃げ出しやすい、見栄を張りやすい、格好を付けやすい、人に弱みを見せられない、人に相談できない、親しい関係に耐えられない、暴力的な気晴らしを求める等）が形成されて、社会不適応行動（逃避、家出、離職、放浪、自殺企図の反復、暴力的な気晴らし、銃への執着）が助長され、非行や犯罪に及びやすい状況が作り出されたという考察が行われました。

再犯の危険性や支援計画の見立てにおいては、N夫の性格を変えることは難しいとしても、事件時と同じ状況（孤独で、孤立していて、心のよりどころがなく、死ぬことばかり考えて放浪し、捨て鉢な、怒りが強まった状態）に陥らない生活を維持できるように支援しながら、少しでも、気持ちや考えや行動を変えることが有効ではないかという、具体的な意見が出されました。方法としては、専門家による継続的な個別支援を行うこと、教養学習や職業訓練によって能力を開発すること、同じような立場、境遇の仲間との関係を作ること、趣味や楽しみの場に参加すること、できれば、家族との関係調整を行うこと、例えば、長姉との関係を支えにしながら母との関係を再構築すること等、思い切った様々な方法が提案されました。「彼を愛し続ける妻を得ること」といったユニークな意見もありました。犯罪者への支援経験はほとんどない参加者でしたが、N夫の立場や心情を理解し想像しながら、大胆な考察や、具体的な支援策を提案していました。

N夫に幼い頃から見られた家出、思春期の窃盗、暴行等の非行は、欠乏と援助希求のサインであったと考えられます。公的機関は問題を発見し、介入の機会もあったものの、専門家による保護や育て直し、教育には至らなかったようです。N夫が大人しく従順で、知的能力面の問題も見られ

なかったこと、繰り返していた事件は家出、窃盗などの比較的小さいものであったこと、保護者や同胞の引き取りが可能であったことなどの事情により、本格的な保護を必要とするほど問題は深刻ではないと判断されたのかもしれませんが。当時（昭和 30 年代）は、現在よりも犯罪や非行、緊急性の高い社会問題が山積していて、保護事件に手が回りにくかったのか、家庭内暴力や子ども虐待について、現在のように問題重視されていなかった可能性もあります。

(3) 死刑判決と死刑制度について

N 夫の事例と関連して、もう一つ議論したテーマがあります。それは、N 夫に対する死刑判決と、死刑制度についてどう考えるかです。これは、犯罪心理学の範ちゅうを越える刑事政策的なテーマではありますが、N 夫の事例に止まらず、立ち直り支援を考える際に重要な問題として取り上げました。

事件時 19 歳の少年であった N 夫の判決は、第一審で死刑、控訴審で無期懲役、差し戻し後再度死刑を言い渡され、第二次上告審により死刑確定に至りました。20 年を要した最後判決は、死刑適用基準の一つとされており、是非については、未だに賛否両論があるようです。講義でも、「N 夫に対してどのような判決が妥当であったと考えるか。その理由は何か」、「死刑制度についてどう考えるか」と問いかけたところ、参加者の意見は分かれました。

N 夫に対する死刑判決を妥当と考える立場からは、残忍な犯罪によって理不尽に殺された被害者（と遺族）、そして社会は、加害者が死をもって償うことでしか納得できないのではないかという考えが述べられました。加えて、死刑制度がなければ、犯罪が増えるのではないか、社会の秩序が保たなくなるのではないか、死刑制度は経費の削減になるのではないかと意見も挙げられました。

N 夫に対する死刑判決を妥当でないとする立場からは、「殺人」を犯罪として禁止しながら、その国家が殺人を是とするのは矛盾しているのではないか、死刑制度は過度の人権侵害であり、廃止・凍結する国も多いという国際事情が挙げられたほか、拘留後の N 夫には改悔の情が芽生え、妻を得てようやく人間性を取り戻しつつあったのだから、生きながら償い、成長することが必要ではないかという意見も述べられました。

筆者からは、死刑制度については、存置論と廃止論があること、我が国の憲法が標榜する平和主義と死刑制度が矛盾するかどうか、死刑が残虐刑に当たるのかどうかといった観点から、合憲か違憲かの解釈が分かれていること、死刑制度に期待される、応報・犯罪抑止機能の代替として（仮釈放の可能性がない）終身刑が設置されている国があること等を紹介し、存否についての結論は出さずに議論を終了しています。

講義後の参加者のコメントには、死刑判決、死刑制度について、より身近な人権問題として考えることができた、平和主義理念等とも関連付けて捉え直す機会になったとの感想がありました。

3. 社会復帰支援とポジティブ・アプローチ

講義の一環として、東京都内の更生保護施設へ見学に赴き、併せて事例検討を行いました。この見学では、犯罪者の社会復帰支援の現場に触れ、立ち直りの支障となるものや、支援の難しさも体感してもらいたいと考えました。

(1) 更生保護施設見学

東京スカイツリーのお膝元に位置する更生保護施設、「東京実華道場 ステップ押上」では、はじめに、加持啓輔施設長から、我が国の更生保護施設の歴史と現状についてご講義いただきました。明治時代、一人の受刑者が刑務所を出所し、頼る親族も生きる術もなく途方に暮れたものの、再犯をしてはならないという指導に愚直に従い、結局身投げして亡くなってしまったこと、それを悲しんだ実業家金原明善氏らが、私財を投げ打ち更生保護事業を開始したこと、それは、女子教育の先見者であった下田歌子氏が、現在の実践女子大学の前身である、実践女子校を創立したのと同じ時代であったことなどが語られました。また、加持施設長は、我が国と米国における、犯罪者に対する考え方を比較し、社会契約思想が強い米国は、社会契約に違反した犯罪者から社会的権利を奪い、社会から排除しようとする通念が強い一方、我が国には、たとえ罪を犯した人であっても、社会から排除せず、再び彼らを社会に受け入れ共に生きようとする保護の通念があると説明されました。

(2) 社会復帰が停滞した事例

次に、刑務所出所後に更生保護施設に帰住した20代の男性事例C（個人情報が特定できないよう修正・再編された架空事例）の検討が行われました。男性Cは受刑中、保護者等から引受を拒否されてすっかり意欲を失くし、投げやりな生活を送っていたものの、更生保護施設職員の面接を受け、引受の可能性があるという励まされた後は、前向きに受刑生活を送るようになり、仮釈放を許可されました。出所後も直ちに就職し、自立を目指して働き始めました。ところが就職後一ヶ月程で仕事をやめてしまい、その後は、保護観察官や更生保護施設職員の指導にも応じず、部屋に引きこもるようになってしまいました。そこで加持施設長から、こうした状態に陥った男性Cに対して、今後どのように働き掛けることが立ち直りのために有効と考えるかという問いが投げ掛けられました。

この問いに対して、参加者は短時間のグループ討議を行い、意見をまとめて発表しました。グループ討議では、N夫の事例検討で学んだ方法、すなわち、問題の見立てと強みの発見に基づき、具体的な支援プランを立てるというやり方が活用されました。発表された支援プランは、①指導者が親身に寄り添い、彼の話を聞きながら、彼自身の感情や考えに向き合わせる、そして彼自身が何を望んでいるのか、その実現のためにどうすれば良いかを話し合い、彼自身が行動を起こすことを励ましていく、②彼と同じような立場や境遇にある仲間との話し合いの機会を作る、③施設内でできそうな役割に従事させて、役立つ自分を意識できるようにする、④父親のような上司がいる小規模な職場への再就職を試みさせる、⑤仕事以外の楽しみや趣味を見付けさせる、⑥家族との交流の場を作り、過去の気持ちを整理させるといった内容でした。

(3) ネガティブ・アプローチとポジティブ・アプローチ

これらのプランの提案に対して、加持施設長はかなり驚かれた様子でした。これまで様々な見学者に、対象者に対する支援方法の意見を尋ねてきたところ、見学者は、仕事をやめてしまい、職員の指導も聞き入れずに引きこもっているという現状に対して、とんでもない、甘えている等との感想を述べ、対象者を「叱責する」「説得する」ことで反省と自覚を促す、それでも効果がなければ、「もう一度刑務所に入れて頭を冷やさせる」といった指導意見を出すことが多かったとのことでした。

た。ところが、今回の参加者は、対象者に寄り添いながら自発性を引き出し、対象者自身の強みを活かすための複数の方法を提案してくれた、このように具体的でポジティブなアイデアが提案されたことは予想外だった。そのようなやり方こそ、ステップ押上の職員が普段から心がけ、目指している方針だ、と述べられました。

加持施設長から、立ち直り支援においては、犯罪リスクの回避（リラプス・プリベンション）、すなわち、ネガティブ・アプローチも必要ではあるが、それだけでは不十分である。本人が目指す生き方や目標への気付きを促しながら、本人の強みと資源を生かしていく、グッドライフ・モデルに基づくポジティブ・アプローチが重要であるとの説明がなされました。また、犯罪からの離脱、改善更生のための支援は切れ目なく、長く続けていくことが必要で、刑務所で終わるのではなく、社会内でも継続されていく有効性が述べられました。

見学後の参加者の感想には、自分が述べた意見に対して、施設長が笑顔で頷き、褒めてくれたことで、力付けられて自信が高まり嬉しかったこと、気持ちに寄り添ってくれる人や仲間がいることで、元気に前向きになれると実感したこと、犯罪者も自分たちと同じような気持ちを持ち、同じ日本で、同じ時代を共に生きる仲間であると改めて感じたこと、将来、心理支援の仕事をしたい気持ちが一層強まったことなどが記載されていました。

終わりに

講義を通じて、犯罪行動の背景には、心理的な痛みや、そうした痛みから逃れようとする動機があることを伝えました。また、犯罪者は、特異な人たちではないものの、心の痛みや傷付きの影響から、特異な心理状態に陥っていること、その心理状態を変化させることが立ち直り支援につながる視点を伝えました。参加者は、それらの視点をまっすぐに受け止め、犯罪者の立ち直り支援について即座に考え始めました。

本講義は、土曜日に開講された選択科目であったにもかかわらず、多くの参加者が受講し、話し合いや見学にも意欲的に参加してくれました。コメント・ペーパーに、毎回のように感想や疑問、自らの体験等を熱心に記載してくれた参加者、講義後に質問や相談に訪れ、おしゃべりをしてくれた参加者もいっしょいました。参加者の感想や意見は、講義を重ねる中で変化し、予想を超えるような独自の見解が示されることもありました。とりわけ、更生保護施設見学時の、参加者の自立した振る舞いや積極的な意見発表には目を見張るものがありました。そうした柔軟な感性に驚き、刺激され、新たな気付きを得ることが多くありました。このような参加者の姿に、筆者は、立ち直ろうとする犯罪者や非行少年の姿を重ねていた面があります。両者の共通点は、主体的に歩み、成長しようとする姿勢ではなかったかと振り返っています。

参加者の柔軟な感受性、率直な物言いや振る舞いに力付けられ、また、本講義を行うチャンスをいただいたことへの感謝も込めて、平成 27 年及び 28 年に実施した講義のまとめと振り返りを記した講義ノートを作成し、紀要に掲載していただこうと考えました。

参加者の皆さん、一緒に、学び考えて下さってありがとうございました。皆さんが今後も、自ら

学び考え、課題や役割に挑みながら成長していかれることを期待し応援しています。

引用・参考文献

- イエイツ, P.M.、プレスコット, D.S. (藤岡淳子監訳) 2013 グッドライフ・モデル 性犯罪からの立ち直りとより良い人生のためのワークブック 誠信書房 (Pamela M. Yates and David S. Prescott 2011 Building A Better Life : A Good Lives and Self-Regulation Workbook *Safer Society Foundation, Inc.*)
- 石川義博 2007 少年非行の矯正と治療—ある精神科医の臨床ノート 金剛出版
- カンツィアン, E.J.、アルバニーズ, M.J. (松本俊彦訳) 2013 人はなぜ依存症になるのか 自己治療としてのアディクション 星和書店 (Edward J. Khantzian, M.D., Mark J. Albanese, M.D. 2008 Understanding Addiction as Self Medication Finding Hope Behind the Pain *Rowman & Littlefield Publishers, Inc.*)
- 大淵憲一 2006 犯罪心理学 犯罪の原因をどこに求めるのか 培風館
- 近藤恒夫 2000 薬物依存を超えて 回復と更生へのプログラム 海拓舎
- 佐木隆三 1994 死刑囚 永山則夫 講談社
- 齊藤万比古 2014 発達障害について 心と社会 45 巻 3 号 日本精神衛生会
- 杉山登志郎 2009 子どもの発達障害と情緒障害 講談社
- 杉山登志郎 2011 発達障害のいま 講談社
- 瀧村美保子 2016 少年鑑別所におけるアセスメントの実態と相談機能の充実 現代社会における青少年相談のあり方～複雑化する青少年問題にどう取り組むか～ 第32回全国青少年相談集会報告書 国立青少年教育振興機構
- ダットン, K. (小林由香利訳) 2013 サイコパス 秘められた能力 NHK 出版 (Dutton Kevin 2012 The Wisdom of Psychopaths *Conville & Walsh Limited*)
- ブラム, D. (藤沢隆史他訳) 2014 愛を科学で測った男—異端の心理学者ハリー・ハーロウとサル実験の真実 (Blum Deborah 2002 Love at Goon Park Harry Harlow and the Science of Affection)
- 長 徹二 2015 依存とは害か?—自己治療仮説を治療に活かす— 依存と嗜癖—やめられない心理 心の科学 (No.182) 日本評論社
- なだいなだ 1998 アルコール問答 岩波書店
- 原田隆之 2015 入門 犯罪心理学 ちくま新書
- 藤岡淳子 2007 犯罪・非行の心理学 有斐閣ブックス
- 藤岡淳子 2017 加害の背後にある「傷」をどう扱うか? 犯罪・非行臨床を学ぼう 臨床心理学 (No.102) 第17巻第6号
- 堀川恵子 2013 永山則夫 封印された鑑定記録 岩波書店

- 松本俊彦 2009 自傷行為の理解と援助―「故意に自分の健康を害する」若者たち 日本評論社
- 吉岡一男 1990 刑事政策の基本問題 成文堂
- ロバート・D・ヘア（小林宏明訳） 1995 診断名サイコパス―身近にひそむ異常人格者たち
（Dr. Robert D. Hare 1993 Without Conscience. The Disturbing World of the Psychopaths
Among Us *Pocket Books, New York*）
- アルコールクス・アノニマス（日本語翻訳改訂版（個人の物語付き） 2002 博進堂
- 研修教材 矯正心理学 2014 法務省矯正研修所編
- 犯罪心理学事典 2016 日本犯罪心理学会 丸善出版
- 薬物依存の現在 2010 こころのりんしょうアラカルト（No. 121）第 29 巻 第 1 号

